

## ペテロの手紙第一4章12-19節 「キリストのゆえに苦しみ」

### 1A 燃えさかる火の試練 12-14

1B 驚き怪しまない 12

2B 栄光の喜び 13

3B 留まる御霊 14

### 2A キリスト者としての苦しみ 15-16

1B 加害者としての苦しみ 15

2B 御名をあげめる 16

### 3A 神の家から始まる裁き 17-19

1B 福音に従わない人たちへの裁き 17

2B 救われない罪人 18

3B 創造者に任せる魂 19

## 本文

ペテロの第一の手紙4章の後半、12節からです。私たちは、ペテロによる第一の手紙で、「迫害下にあるキリスト者に対する励まし」がその主題になっていることを見て行っています。普通、人々が宗教を持つことの原因として、「何か良いことが起こるから」というものがあります。病気が治ったり、逼迫していた経済が元通りになる、家族や夫婦が円満になるとか、何か良いことが起こることを期待します。しかし、キリスト者の信仰が必ずしもそうなることではない、むしろキリスト者だということで苦しみを受けることがあります。その時に、キリスト者とその信仰を持つ意味というのが、試されます。それは、キリストの命にあずかることだということを思い出すことです。キリストが死なれ、甦られたように、私たちが罪に支配された古い人に死に、甦りの命をもって生きることです。そして、このキリストにある神の命にあずかることこそが、救いであります。ゆえに、迫害や苦しみを受けることによって、かえって信仰が強められ、教会が前進したという歴史を、私たちキリスト教会は持っています。そして、その御霊の働きが今も続いているのだというのが、現代を生きる私たちへの御言葉でもあるのです。

### 1A 燃えさかる火の試練 12-14

1B 驚き怪しまない 12

12 愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、

ペテロが、同じ兄弟として、また教会の指導者として、「愛する者たち。」という言葉から始めています。「あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練」とあります。ペテロはこ

れまでも、信仰の試練を「火によって精錬される」道具として語っていました。「1:7 信仰の試練は、火を通して精錬されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。」ですから、私たちは試練を受けると、自分が何を信じているのかが明らかにされて、試されます。何も起こっていなければ、自分も回りも、信仰は持っていると自負しているかもしれませんが、真実にキリストへの信頼、信仰を持っている関係なのかを知るために、神が試練をお許しになることがあります。ある大きな教会の牧師が、罪を犯して辞任したのですが、それで一部の人は教会を去り、信仰からも離れてしまいました。その人たちは、その牧師のカリスマ、その話し方や身振り手振りで魅了されていたかもしれませんが、けれども、多くが残りました。そして新しく任命を受けた牧師の指導の下で、教会がさらに強められました。周囲の他の教会も、全面的にその教会に助けの手を伸ばしたそうです。私たちの人生で、いろいろなことが起こりますが、それらは信仰を清める道具として神は用いておられます。

そしてここでは、「燃えさかる火の試練」と言っています。ペテロは、ここにおいてこれまでの試練とは違うもの、とてつもなく激しい試練であることを強調しています。キリスト者に対する迫害は、初めはユダヤ人からのものでした。ユダヤ教の中で異端とみなされていたからです。けれども、ローマ帝国が組織的に迫害を行なったのは、皇帝ネロによるものです。64年にローマで大火事が起こりました。それをネロはキリスト教徒の仕業であるとでっち上げました。ネロ自身の自作自演、彼が放火したのではないとも言われています。それで、彼はキリスト者をなぶりものにし、殺していきました。キリスト者は、野獣の毛皮をかぶせられ、犬に噛み裂かれ倒れました。ネロは、カイサル家の庭園で彼らを十字架に縛り付け、火を付けて、松明代わりにしていました。

そして、これらのことはローマの都から始まっていました。今、ペテロは、おそらくは自分自身ローマにおり、そしてパウロは既に皇帝ネロによって処刑され、そしてパウロが牧会していた小アジアの諸教会に対してペテロは手紙を書いていると思われます。したがって、これまでもいろいろな形で試練や困難、また迫害があったのですが、今、ローマで起こっている大迫害の程ではありませんでした。けれども、小アジアのところまで来るのは時間の問題でした。そして90年代になると、皇帝ドミティアヌスが小アジアに対しても迫害の手を伸ばしました。それが黙示録の七つの教会に対するヨハネの言葉に表れています。そこから250年ぐらいずっと、キリスト教会はローマによって迫害され続けたのです。ゆえに、ペテロは今、まだ迫害がそれほど激しくなっていない時に、「これから、燃えさかる火の試練が来るのだ」と警告しているのです。

そこでペテロは、「何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく」と戒めています。これは想定内のことである、とペテロは話しているのです。ペテロはかつて、驚き感っていることはないと言ったことがあります、五旬節に聖霊が降った時のことです。世界中から集まってきたユダヤ人が自分たちの出身地方の言葉で弟子たちが神を賛美しているのを見て、驚きまどったのですが、これは前もってヨエルが預言していたことだと言いました、「神は言われる。終わりの日に、

わたしの霊をすべての人に注ぐ。(使徒 2:17) 大迫害も、同じように驚き怪しむようなことではなく、義のゆえに迫害を受けられたキリストに倣う者たちなのだから、自分たちが迫害を受けるのは想定内のことなのだ、ということです。「ヨハネ 15:19-20 もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです。しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。もし彼らがわたしのことばを守ったなら、あなたがたのことばをも守ります。」

私たちは、「将来、大きな問題が起こった時に信仰を守れるのかどうか？」ということで心配する必要はありません。しかし、「将来、大きな問題が起こるかもしれない」という心の用意は必要です。そして日頃から、小さなことについて、肉の思いではなく御霊の思いによって反応し、神に応答していることが必要です。大きな事が起こってからは、感情的に反応してしまい、驚き怪しむだけになり、御心になかった行動に移せないからです。

## 2B 栄光の喜び 13

13 むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。

ペテロはこの手紙で、何度となく、焦点をイエス様ご自身に合わせようとしています。「キリストの苦しみにあずかれる」と言っています。私たちがキリスト者になった目的は、キリストにあずかることです。この方に結ばれており、ちょうど妻が夫を知るようにキリストを知ることであります。そこでそこには、キリストの苦しみに会うことも含まれるのです。2章 21節以降にありました。「2:21-23 あなたがたが召されたのは、実はそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。」

そして、そのことについて「喜んでいなさい」と言っていますね。このことを知ってほしいですね、私たちの喜びは、キリストにあって、罪や世の思い煩いから離れていることです。主との関係のことです。自由にされていることです。パウロが、主にあって喜ぶと何度も話したピリピ人への手紙では、彼自身はローマで獄中の身でした。世界の迫害されている教会を眺めてみると、迫害を受けてきた教会では、たとえ外部からの脅しがあっても、それでも人々が教会に訪れるとのことです。パキスタンにある教会では、金属探知機が入口にあるけれども、それでも自爆テロをする人が後を絶ちません。それで、手足がもぎれる兄弟姉妹が出て来ます。けれども、それでも教会には数多くの人々が危険を顧みずに礼拝に集うのです。そこにある喜びは、何にも代えがたいものだから

です。

そして、「それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるため」と言っています。これは終わりの日のことです。イエス様が言われました、「マタイ 5:11-12 わたしのために、ののしられたり、迫害されたり、また、ありもしないことで悪口雑言を言われたりするとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。喜びおどきなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのだから。あなたがたより前に来た預言者たちも、そのように迫害されました。」そして弟子たちは、確かに喜んで迫害を忍びました。「使徒 5:40-41 使徒たちを呼んで、彼らをむちで打ち、イエスの名によって語ってはならないと言い渡したうえで釈放した。そこで、使徒たちは、御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜びながら、議会から出て行った。」

主が再び来られる時に、主は全てのことについて正しい裁きを行われます。またキリストの栄光が目に見える形で現れるので、キリストを待ち望む者たちにとっては最高の時となります。「2テサロニケ 1:8-10 そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。その日に、主イエスは来られて、ご自分の聖徒たちによって栄光を受け、信じたすべての者の・・・そうです。あなたがたに対する私たちの証言は、信じられたのです。・・・感嘆の的となられます。」主が、これまでの全てのことについて、報いをもたらされます。この地上において不正があり、道が曲がっており、義は踏みにじられていました。けれども、それを全て正すために戻ってこられます。その時に、義のゆえに迫害されてきた者たち、苦しみを受けていた者たちは喜び踊るのです。

### 3B 留まる御霊 14

14 もしキリストの名のために非難を受けるなら、あなたがたは幸いです。なぜなら、栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくださいからです。

ペテロは、「あなたがたは幸いです」と言って、まさに主イエスの山上の垂訓における宣言を思っ、話しているようです。この幸いは外的な要因ではなく、内にある確信から出て来る幸いです。「キリストの名のために非難」ということですが、キリストの名とはこの方のご性質、榮譽、名声、そういったものです。ただキリスト者だということだけで、それが原因で非難や中傷、そしりを受けるのであれば、それは幸いなことだと言っています。

そして、「栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってください」と言っていますね、ここはとても大事です。今、「キリストの栄光が現われる」とペテロは言いましたが、その再臨の時を待たずして、キリストの栄光が御霊によって迫害を受けている者たちに留まります。献身している人の顔や手は美しいですね。この前、戦争映画を見ていて、負傷した兵士たちを救護す

る看護師の手が、チョコレートを掴んで割ろうとしています。その手がボロボロになっていて、手から血痕がどんなに水洗いしても取れないぐらいこびりついています。美しい手です。けれども、献身ではなく、殉死する人々、殉教する人々の魂は栄光に輝いています。斬首されるのを見るにも、それは単に残虐な場面ではなく、そこに聖い空気が漂っています。主が死なれる時、その十字架の残酷さには、単に犯罪者がそこで惨たらしく死んでいくのとは異なり、聖さと、神の栄光が留まっています。同じように、キリストの名のゆえに迫害される者はそこに栄光の御霊が留まっているのです。

そして、それが証しの機会ともなります。迫害を受けているからこそ、良い行ないに裏付けされた証言は人々に強いメッセージを与えます。「ルカ 12:11-12 また、人々があなたがたを、会堂や役人や権力者などのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配するには及びません。言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。」こうやって、教会が困難な時にある時に、御霊の注ぎによって力強い証しを立て、それで御言葉が広がります。

## **2A キリスト者としての苦しみ 15-16**

### **1B 加害者としての苦しみ 15**

15 あなたがたのうちのだれも、人殺し、盗人、悪を行なう者、みだりに他人に干渉する者として苦しみを受けるようなことがあってはなりません。

今、キリスト者が犯罪人のようにして捕らえられています。犯罪人のようにして、懲らしめられています。もし、「人殺し、盗人、悪を行なう者、みだりに他人に干渉する者として苦しみを受ける」ということであれば、何の誉れもそこにはありません。「2:20 罪を犯したために打ちたたかれて、それを耐え忍んだからといって、何の誉れになるでしょう。」当時は、このことについて大きな圧迫、誘惑だったことでしょう。ちょうどペテロ自身が、イエス様のところに捕える者たちがやって来て、剣でもって抵抗しましたが、イエス様はやめさせたのと同じです。世において不正が行われ、不当なことが行なわれ、その権力者に対して抵抗しなければいけないと感じます。世界の歴史の中で、そして現代においても、抵抗の名の下で不当な行為を是認する動きがあります。例えば、パレスチナ解放戦線というものは、そうです。イスラエルに占領されているということで、その抵抗運動であるから、イスラエル兵士だけでなく、一般人も殺傷してよいとしています。また、キリスト教会でさえ、キリストは弱者の味方であるから、そうした動きを戒めるところか、一緒になって力ある者を非難することによって、是認しています。

しかし、それをやってはいけないとペテロは教えているのです。「2:13-17 人の立てたすべての制度に、主のゆえに従いなさい。それが主権者である王であっても、また、悪を行なう者を罰し、善を行なう者をほめるように王から遣わされた総督であっても、そうしなさい。というのは、善を行なって、愚かな人々の無知の口を封じることが、神のみこころだからです。あなたがたは自由人として

行動しなさい。その自由を、悪の口実に用いないで、神の奴隷として用いなさい。すべての人を敬いなさい。兄弟たちを愛し、神を恐れ、王を尊びなさい。」キリストの国は、世のものではありません。イエス様がピラトの前で告白したとおりです。もし世のものであれば、弟子たちが戦ったはずだと言われました。そうではないのは、世のものではないからです。

## 2B 御名をあがめる 16

16 しかし、キリスト者として苦しみを受けるのなら、恥じることはありません。かえって、この名のゆえに神をあがめなさい。

「キリスト者」という言葉ですが、今は、信仰を持った者たちが普通に使っている言葉です。けれども、これは当時、不信者が信者たちを見て、軽蔑して使った蔑称です。かつて、日本で「ヤソ」と呼んでいたのに似ています。使徒の働きでは、アンテオケにおいて教会の者たちが、周囲の人々から「キリスト者」と呼ばれたとあります(11:26)。そしてヘロデ・アグリッパ二世の前で弁明をしたパウロに向かって、「26:38 あなたは、わずかのことで、わたしをキリスト者にしようとしている。」と言っています。ですから、ヤソとして苦しみを受けるのであれば、という意味合いになります。ヤソなのですから、恥じ入ることですね。けれども、ペテロはむしろ、「恥じることはありません」と言っているのです。キリストの名、イエスの名によって辱めを受けるのであれば、むしろ神をあがめなさいと勧めています。

## 3A 神の家から始まる裁き 17-19

### 1B 福音に従わない人たちへの裁き 17

17 なぜなら、さばきが神の家から始まる時が来ているからです。さばきが、まず私たちから始まるのだとしたら、神の福音に従わない人たちの終わりは、どうなることでしょう。

ペテロは、またパウロも自分の手紙の中で、世から迫害を受けることを話してから、必ず神が世界を裁かれることを語っています。世がキリストにある者を迫害するならば、その苦しみに応じて、世に対して苦しみを与えるということを語っておられます。「2テサロニケ 1:4-7 それゆえ私たちは、神の諸教会の間で、あなたがたがすべての迫害と患難とに耐えながらその従順と信仰とを保っていることを、誇りとしています。このことは、あなたがたを神の国にふさわしい者とするため、神の正しいさばきを示すしるしであって、あなたがたが苦しみを受けているのは、この神の国のためです。つまり、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現われるときに起こります。」

私たちの神は、「焼き尽くす火(ヘブル 12:29)」であると聖書に書いてあります。出エジプト記を見れば、ホレブ山にいたモーセのところに、柴の中からモーセを呼ばれましたが、火で燃えていま

した。またシナイ山に降りてこられた時も火によるものでした。それは、恐ろしい光景でありましたが、それと同時に神の聖なる姿を表していました。イスラエルの民にとっては、この方の聖なる姿にあずかることであり、また同じイスラエルの家においても、反逆者を選び分けるための火でもありました。コラの反乱の時に、その反逆に加担した者は持っていた火皿の火によって焼き尽くされましたね。そして、その火は神を敬わない異邦人に対しては、裁きの火でありました。ソドムとゴモラに対する火と硫黄がそれです。

ここで話している、神の裁きもそれと同じです。「さばきが神の家から始まる」時であると言っていますが、それは第一に聖徒たちをますます聖なる者とするためのものです。今、見ました火のように燃えさかる試練は、その信者たちをますます聖めるものでした。火の中で精錬されるように精錬され、その信仰によって神に賞賛を受けます。コリント第一 3 章において、各人の働きが、金、銀、宝石、木、草、藁のようなもので、火とともに主が現れ、それで各人の働きの真価を試すと書かれています。その建物が残っていれば、それにしたがって報いを受けます。

そして次に、「神の家の選り分け」が行なわれます。神の家に属していると言われている者たちであっても、神は実はそうではないものを選び分けなさいます。エゼキエル書 9 章において、亜麻布を着て、腰の書記の筆入れをつけている者が神殿にいました。神殿では、長老たち、祭司たち、女たち、一般のイスラエル人が堂々と、偶像礼拝と忌まわしいことを行なっていました。そこで、主は裁きを行われます。けれども、その前にその筆入れを持っている者に、「9:4 町の中、エルサレムの中を行き巡り、この町で行なわれているすべての忌みきらうべきことのために嘆き、悲しんでいる人々の額にしるしをつけよ。」と主は言われます。額にしるしを受けていない者たちが、六人の武器を持っている者たちによって殺されていきます。このようにして、神の裁きは神の家から始まっていました。それから周囲の異邦人の国々へ裁きを神が行なわれます。

神の家から裁きが行なわれた様子は、例えば、アナニヤとサツピラが偽善の罪、聖霊に偽る罪を犯して、その場で倒れました。彼らが地獄に行ったということではなく、神の聖なる御霊のおられるところで、人々が偽っているのかそうでないのかが明らかにされるということです。パウロは、テモテに罪も、また良い行ないも後で明らかにされることを話しました。「1テモテ 5:24-25 ある人たちの罪は、それがさばきを受ける前から、だれの目にも明らかですが、ある人たちの罪は、あとで明らかになります。同じように、良い行ないは、だれの目にも明らかですが、そうでないばあいでも、いつまでも隠れたままでいることはありません。」

このようにして、信仰を持っている者たちでさえ、神の裁きがあるのだから、福音に反抗している者たちがどうして裁きから免れることがあるだろうか？と言っています。そこには、彼らが神に対して個々人が犯している罪もあるでしょうが、信者たちを苦しめている迫害の罪も含まれます。

## 2B 救われない罪人 18

18 義人がかろうじて救われるのだとしたら、神を敬わない者や罪人たちは、いったいどうなるのでしょうか。

これは、箴言から影響を受けている言葉です。「11:31 もし正しい者がこの世で報いを受けるなら、悪者や罪人は、なおさら、その報いを受けよう。」正しい者が、地上で神の懲らしめを受けることがあります。ダビデを思い出しますが、彼がバテ・シェバとの姦淫の罪、そしてその夫ウリヤを殺す罪によって、彼の家の中に剣が離れなくなるという裁きを受けました。もし彼が神を信じる者でなければ、これは単に自分のしたことの報いであり、自業自得ということになりますが、彼は神の憐れみを信じていたがゆえに、悔い改めに導かれ、神の救いへとつながっていったのです。このようにして、正しい者がこの世で報いを受けます。ですから、全く信ぜずに、悔い改めずに、神に立ち返らなかった者にとっては、救われる可能性がないということになります。

ロトのことを思い出してください。彼は、神を信じていました。けれども、かろうじて救われた人の一人です。彼の家族、既婚の娘の家族は全く御使いの警告の言葉に耳を傾けませんでした。たわごとのように思われたからです。そして未婚の娘二人と妻を連れて、ソドムから出て行きました。しかもためらっていました。そして振り向いたロトの妻は、塩の柱となってしまいました。そして未婚の娘二人だけが残りました。このことについて、ペテロは第二の手紙で書き記しています。「2:7-8 また、無節操な者たちの好色なふるまいによって悩まされていた義人ロトを救い出されました。というのは、この義人は、彼らの間に住んでいましたが、不法な行ないを見聞きして、日々その正しい心を痛めていたからです。」

## 3B 創造者に任せる魂 19

19 ですから、神のみこころに従ってなお苦しみに会っている人々は、善を行なうにあたって、真実であられる創造者に自分のたましいをお任せなさい。

ここです、これがペテロが信者たちに言いたかったことです。自分が受けている不当な仕打ちについては、「神に任せなさい」ということです。初めに、「神のみこころに従ってなお苦しみに会っている」苦しみが、神の御心を行なっていてなおのこと受けているものだ、ということです。神が願っておられることを行なっているかどうか？であります。私たちは御心という言葉聞いた時点で、占いの結果のように考えます。御心というのはそういうものではありません、自分たちに知らないものではなく、既に知らされていることです。すでに行ないなさいと命じられていることです。それから、「善を行なうにあたって」と言い換えています。神の御心を、まだ神を知らない異邦人に対して行なっているのであれば、それは良い行ないであります。2章12節で、「異邦人の中であって、りっぱにふるまいなさい。」と教えていました。

そして、「真実であられる創造者に自分のたましいをお任せ下さい」と最後に勧めています。これは興味深いですね、ここで救い主、裁き主とか呼ばれてもいいのに、主は「真実であられる創造者」と呼ばれています。それは、創り主であられる方は、その子どもたちの必要を知らないことはなく、全ての必要を満たして下さるからです。「あなたがたの父なる神は、あなたがたが願う前に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。(マタイ 6:8)」ですから、初代教会の聖徒たちは、ペテロとヨハネが捕えられ、イエスの名によって語ってはいけないと厳に命じられた時に、次のように祈りました。「使徒 4:24 これを聞いた人々はみな、心を一つにして、神に向かい、声を上げて言った。「主よ。あなたは天と地と海とその中のすべてのものを造られた方です。」そして、彼らは大胆に御言葉を語る事が出来るように祈り、聖霊に満たされて、語り始めました。彼らは迫害から免れるのではなく、迫害の中にあっても、御言葉を語り、主の御名によって不思議と癒しを行なわせてくださいと祈ったのです。

「任せる」という言葉に、2章 23節にある思いがあります。「正しくさばかれる方にお任せになりました。」イエス様が正しくさばく父なる神に任せられたのです。ご自身が最後の息を引き取られるときに、「父よ。わが霊を御手にゆだねます。(ルカ 23:46)」と言われました。神ご自身の主権に、また主が掌握しておられる将来に、自分の命を任せるということです。真実な方ですから、必ず報いてくださいます。私たちがいかに、この方に身を任せられるかにかかっています。身を任せてしまったものは、楽になります。イエス様がゲッセマネの園の後で十字架に向かわれたのと同じです。